

他人の人生



人間にとっての未知の領域と既知の領域の分量を比べれば、未知の領域の方が圧倒的に多いと思う。例えば、どんなに旅行が好きで様々な国を訪れた経験がある人でも、未だに訪れたことがない場所があるにちがいないからである。地球上にある全ての土地を踏破するのは、ほぼ不可能に近い。だから、わたしたちは地球上の99パーセント以上の場所を知らぬままに一生を終える。

「しかし、未知なる世界は何も見知らぬ場所や外国だけあるわけではありません。人間は、みな自分一人の人生しか生きません。しかし、「他人の人生」というのも実に不思議な未知なる世界です」

これは拙作「交換王子」（論創社）の中の一節だが、本作に登場する二人の若者は、姿形がそっくりだったがゆえに互いの人生を入れ換えることになる。自分とは違う「他人の人生」を生きることになるのである。そこは見知らぬ場所や遠い外国に匹敵するくらいの未知なる世界であると思う。

思うに、一人の人間が99パーセントの土地を踏破できないように、「他人の人生」も決して踏破できないものであろう。そもそも、ほど特殊な理由がなければ、ある人に「他人の人生」を生きる機会は訪れない。わたしたちが映画を見たり小説を読んだりするのは、決して踏破できない「他人の人生」を擬似的に生きるための一つの方策ではないだろうか。それもそれで一つの小旅行である。わたしは、旅行はほとんどしない人間が、わたしの未知なるものに出会いたいという欲求は、そちらの方法でもっぱら満たしている。

高橋いさを

〈劇団シヨーム主宰 劇作・演出家〉